

---

---

# テスの物語をいかに解釈するか？

——ハーディと改変——

上原早苗

〈名古屋大学〉

---

奉公先で〈淪落の女〉となった貧しい行商人の娘テスは、その後数々の困難を乗り越えて新たな人生を歩み出すが、夫に過去を告白すると遺棄されてしまい、さらなる苦難の道を歩むことになる——見明快かつ単純なプロット展開を見せる『ダーバヴィル家のテス』だが、テスが〈淪落の女〉になる経緯は不透明性を孕んでいる。なかでも問題視されてきたのが第1局面「乙女」の御狩場の出来事をめぐる解釈であり、テスとアレクの関係の実体であろう。週末にチェイスバラの市に出かけたテスはささいなことから仲間と口論となり、「一人駆け出して逃げよう」<sup>1</sup>とすると、そこへ馬に乗った奉公先の息子アレクがどこからともなくやって来る。追い詰められていた「彼女は、衝動に身を委ねて」(94)アレクの馬に飛び乗り、二人は「灰色の彼方」(94)へ、御狩場の森へと消えてゆく。テスは疲労のため「枯葉のうえで夢心地に陥って」(101)しまうのだが、その後、二人の間に一体何があったのか。真相はアレクによるテスの凌辱であったのか、それとも両者の暗黙の合意が含意される誘惑であったのか。

ダーバヴィルは身を屈めた。規則正しい、やさしい息遣いが聞こえた。彼は膝をつき、さらに屈みこんだ。彼女の吐息が顔に暖かくあたり、次の瞬間、彼の頬は彼女の頬に触れていた。彼女はぐっすり眠っており、その睫毛には涙の雫があった。

闇と沈黙があたり一面を支配していた。二人の頭上には御狩場の森の、太古からのイチイや榎の大樹が聳え、梢ではそこを時々しているやさしい小鳥たちが最後の仮眠を貪っていた。そのまわりをアナウサギや野ウサギが忍び寄り、飛び回っていた。だが、テスの守護天使はどこにいるのだろうか？ そう問いたくなる者もいるだろう。(102)

語り手は何が起こったのか、読者に率直に伝えようとはしない。それどころか、森に連れ込まれたことを知ったテスの、「半ばしなをつくっているとも、本当に動転しているともとれるような」(99)反応をわざわざ読者に伝えており、語りを積極的に攪乱しているようにさえ思われる。そのため真相をめぐる「凌辱対誘惑」論争が生じるのだが、研究者の見解は多様であり、未だに一つの結論に至らないというのが実状なのである。

そもそも語り手によれば、テスがアレクの許を去る決意をしたのは、「十月も下旬のある日曜日の朝だった。テス・ダービフィールドがトラントリッジに着いた日からほぼ四ヶ月はたっていた」<sup>2</sup>。御狩場の遠乗りの日

---

1 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* ed. Juliet Grindle and Simon Gatrell (Oxford: Clarendon Press, 1983), p. 93. 以下、特に版を明示しない限り、小説からの引用はこの版に拠る。なお翻訳に際しては井出弘之『テス』(東京、筑摩書房、2004年)を参照させて頂いた。

2 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: McIlvaine, 1891), I, p. 145; *Tess of the d'Urbervilles* (London: McIlvaine, 1892), I, p. 145.

は、「九月初旬」<sup>3</sup>のことであったから、テスはおよそ二ヶ月間、少なくとも五、六週間はアレクの許に留まっていたことになる。第5版になると遠乗りの夜が「九月のある土曜日」に変更され、期間もおよそ三週間に短縮されるが<sup>4</sup>、テスがアレクの許に留まっていたという設定自体は最終稿のウェセックス版まで保持されている。「十月も下旬のある日曜日の朝だった。テス・ダービフィールドがトラントリッジに着いた日からは四ヶ月後、そしてあの御狩場の遠乗りの夜から数えておよそ三週間はたっていた」<sup>5</sup>。その間テスはアレクの情婦として暮らし、彼から「美しい服」をあてがわれていたということもテキストには明記されている。遠乗りの夜からおよそ三週間、なぜテスはアレクの許に留まっていたのだろうか。

「ハーディは決してテスの側から見た性的出来事を読者に語らないので、彼女にとってそれがいかなる意味を持つのか、私たちにはわからないのである」と指摘し、ハーディを論難するのはクリスティン・ドゥヴァインである<sup>6</sup>。しかしこの小説を注意深く読み直せば気づくことだが、テスは断片的にはあるが自身の言葉でアレクとの関係について語っており、語り手も御狩場の出来事やその後の事態をテスに寄り添いながら述べている。いや、もっと正確に言えば、第5版にハーディが施した修正の結果、『ダーバヴィル家のテス』の語りは変容し、現在我々が通常手にする最終稿のウェセックス版では、テスにとってアレクとの関係はいかなるものであったのかが語られることになったのである。この点はクリスティン・ブラディとパトリシア・インガムがそれぞれの論考において簡単に触れているが、本章の論点となる改変の意味効果——改変の結果、テキストに産み落とされることになった物語——については論及していない<sup>7</sup>。そこでまず、第2局面「乙女ではなくなって」の最初の章（小説第12章）の一節に注目しつつ、ハーディの手入れによってこの小説の語りがどのように変容したのかを確認し、次いでこれまで閑却視されてきた改変の意味効果に焦点を当てながら最終稿の本文を読み直すことにしよう。『ダーバヴィル家のテス』の第12章には、アレクとの関係を精算するべくテスが密かにトラントリッジを後にし、故郷のマーロットに向かう場面がある。後を追いかけてきたアレクに向かってテスは、自身の感情を最初次のように吐露していた。

「その通りです。もしあなたのことを愛して行って行ったのなら、もしあなたのことを本当に愛していたのなら、そして今でも愛しているのだったら、今のように自分の弱さをこれほど嫌ったり憎んだりしないわ！」<sup>8</sup>

第2版までの本文である。テスはアレクへの想いを明確に否定しているが、しかし、なぜ愛が不在でありながらアレクの許に留まったか、その決定的な事実は沈黙しており、そのためなぜ自身の「弱さ」をテスは悔やんでいるのか、なぜ「自分の弱さをこれほど嫌ったり憎んだり」するのかは曖昧である。第2版までのテスの言葉は一見明確でありながら、その実白濁とした澱のような不透明さを孕んでいると言えるだろう。

しかし第5版では、その不透明さが後退するような方向で小説本文に修正が施されている。

「その通りです。もしあなたのことを愛して行って行ったのなら、もしあなたのことを心から愛していたのなら、そして今でも愛しているのだったら、今のように自分の弱さをこれほど嫌ったり憎んだりしないわ！」

3 Thomas Hardy, “Tess of the d’Urbervilles” the holograph manuscript of *Tess of the d’Urbervilles* held by the British Library, fo. 61; *TD* (1891), I, p. 122; *TD* (1892), I, p. 122.

4 Thomas Hardy, *Tess of the d’Urbervilles* (one-volume edition; London: McIlvaine, 1892), p. 78.

5 *Ibid.*, p. 93.

6 Christine DeVaine, “‘A cloud of moral hobgoblins’: Gender, Morality and Class in *Tess of the d’Urbervilles*,” in *Class in Turn-of-the-Century Novels of Gissing, James, Hardy and Wells* (Aldershot: Ashgate Publishing, 2005), p. 101.

7 Kristin Brady, “Tess and Alec: Rape or Seduction?,” in *Thomas Hardy Annual No. 4* ed. Norman Page (Basingstoke and London: Macmillan 1986), p. 132; Patricia Ingham, *Thomas Hardy* (Oxford: Oxford University Press, 2003), p. 145.

8 MS fo. 82; *TD* (1891), I, p. 149; *TD* (1892), I, p. 149.

いわ！……ちょっとの間、この目があなたに眩んだんだわ、それだけのことよ<sup>9</sup>

「ちょっとの間、この目があなたに眩んだんだわ、それだけのことよ」。第5版において新たに加筆された一文である。「目が眩む (“dazed”）」は、ハーディの小説では繰り返し使用される性的な意味を含意する言葉であり、この加筆によって、テスの心理は新たな、決定的な意味を獲得することになった。つまりこの加筆によって、テスは心からアレクを愛していたわけではないがセクシュアルな感覚は確かにあり、その感覚ゆえにアレクの許に留まっていたことが示唆されてくる。と同時に、欲望に身を委ねたことにテス本人が気づいたために自身を「嫌ったり憎んだり」している、という因果関係も新たに仄めかされたと言えるだろう。

上記の加筆を受けて語り手の言葉にも修正が施されているが、まずは変更前の第2版の本文から見てみよう。

だが可哀想に、この愚かな母親はテスがアレクに対してどのような感情を抱いているのか、ほとんどわからなかった。おそらくそれは、このような状況においては尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ感情だったのだろう。だがそれは、現に動かしがたくそこにあった。だからこそ彼女は前にも言ったように自己嫌悪に陥ったのだ。あの男のことを好きに思ったことは決してなかったし、今もそうだった。彼を恐れ、彼の前でたじろぎ、彼に屈服したのだ、ただそれだけのことだった。<sup>10</sup>

「尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ感情」とは意味深長な言葉である。ここで語り手は、アレクに対するテスの欲望を暗に仄めかしているように思われる。だが、そうした読みがすぐさま裏切られてしまうのは、この一節の最後で語り手は、テスとアレクの関係<sup>レ</sup>を権力関係に解消しているからだ。テスは、「あの男のことを好きに思ったことは決してなかったし、今もそうだった。彼を恐れ、彼の前でたじろぎ、彼に屈服したのだ、ただそれだけのことだった」。語り手のこの言葉によって、仄めかされているように思われたテスの欲望は無化されてしまい、語り手の言う「尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ」テスの感情が一体どのようなものだったのかが不透明になってくる。不透明性を帯びたこの一節から確実に読み取れるのは、テスのアレクへの恐怖心や、恐怖心に貫かれたジェンダー（および階級）の権力関係に留まると言えるだろう。

第5版では、当該箇所は以下のように記されている。

だが可哀想に、この愚かな母親はテスがあの男に対してどのような感情を現在抱いているのか、ほとんどわからなかった。おそらくそれは、このような状況においては尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ感情だったのだろう。だがそれは現に動かしがたくそこにあった。だからこそ彼女は前にも言ったように自己嫌悪に陥ったのだ。あの男のことを心から好きに思ったことは決してなかったし、今は全く好きではなかった。彼女は彼を恐れ、彼の前でたじろぎ、そんな無力なところに、残酷にもつけこまれて屈服したのだった。それから一時、彼の華やかな態度に目が眩んで、しばらくは混乱したまま身を任せていたのだ。だが俄に侮蔑の念が沸き上がり、嫌いになって逃げ出した、ただそれだけのことだった。<sup>11</sup>

「彼女は彼を恐れ、彼の前でたじろぎ、屈服したのだった」とあった箇所が「彼女は彼を恐れ、彼の前でたじろぎ、そんな無力なところに、残酷にもつけこまれて屈服したのだった」に修正されて、テスの無力な状態が強調されてくる。だがこの修正以上に目を惹くのは、「それから一時、彼の華やかな態度に目が眩んで、

9 TD (one-volume edition; 1892), p. 95.

10 MS fo. 89; TD (1891), I, pp. 159–60; TD (1892), I, pp. 159–60.

11 TD (one-volume edition; 1892), p. 102.

しばらくは混乱したまま身を任せていたのだ」という言葉が新たに加筆されていることだ。残酷にもつけこまれて屈服したテスではあるが、「それから一時」恐怖の対象ですらあったアレクに魅せられて、身を任せていたことがこの加筆によって明らかになってくる。精神の埒外で肉体が自立し、他者として立ち現われてくるような事態がテキストに新たに書き込まれたわけである。深い愛情がないにもかかわらずセクシュアルな感覚はある、というのはテスにとり「尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ」ことであろう。また、その「尋常ではない、不自然な、わけの判らぬ」欲望に突き動かされてテスはアレクに身を任し、そのため自己嫌悪に陥った、ということでもあろう。先に見た第5版のテスの科白と同様に、この一節にも愛と欲望の乖離が指摘されている点に注目したい。

加えて留意したい点は、第5版以降の本文ではテスとアレクの関係の変質が読み取れることである。権力関係から始まった二人の関係ではあるが、ある時を境にいつしかセクシュアルな共犯関係へ傾いていたことが第5版刊行時の加筆によって仄めかされているからだ。もっとも、改変が示唆しているのはあくまでもある時点で生じた二人の関係の変質であり、その「ある時」をどの時点と判断するかによって、遠乗り夜の出来事を凌辱と解する可能性は依然として残ることも併せて指摘しておきたい。

さて、第3局面「恢復」になると一転して、ソローの死を乗り越えてトルボトヘイズの酪農場に働きに出たテスとそこに見習いとして住み込む牧師の三男エンジェル・クレアとの愛の物語が紡がれる。テスにとりエンジェルとの絆は、以前のような愛と欲望の乖離ではなく、むしろ両者の合一を齎すものである。が、至福の時は単なる至福の時ではありえず、そこに常に陰のように随伴するのがトラントリッジでの過去である。愛するエンジェルに誠実でありたいと願うテスは、過去を告白しなければならないと思うものの、エンジェルを喪うのではないかと恐れから告白することが出来ない。こうして第3局面以降の語りでは、告白の時を先送りにするテスの逡巡と葛藤が焦点化されてくる。

このように纏めると、単純かつ明確に思われる第2局面以降の語りだが、しかしその語りを、第2局面に施された改変を念頭に置きながら読み返してみると、奇妙なことに気づく。語り手にせよテスにせよ、トラントリッジでの出来事を反芻する場面は第3局面以降の語りにも幾度となくあるのだが、改変に呼応した修正はなぜかほとんど皆無と言ってよく、第5版以降の本文には語りの齟齬が生まれているのである<sup>12</sup>。前述の通り、第2版までの本文ではテスとアレクの関係の内実は極めて曖昧で、確実に読み取れたのはテスの恐怖心に貫かれた権力関係だったが、しかし、第5版の第2局面に加筆が施された結果、テスのアレクに対する欲望や、二人のセクシュアルな共犯関係が読み取れることになった。ただし、それに連動する修正が第3局面以降の本文にはないことから語りにはずれが生まれてくる。つまり第5版以降の本文では、テスとアレクのセクシュアルな共犯関係の前景化（第2局面）とその無化（第3局面以降）というように二つの方向にテキストが引き裂かれているのである。例えば、愛するエンジェルに過去を告白すべきか否か苦悩するテスを、語り手は次のように描写している。

このように悶え苦しんでいるのは、過去に長くて暗いただならぬ関係の思い出をもつ成熟した女ではなく、まだ二十一にもならない、質素な暮らししか知らない娘、大人にならぬうちに小鳥のように毘にか

12 その例外と言えるのが、第2版刊行時に加筆された第5局面44章の一節である。似非説教師となったアレクに偶然再会したテスは、語り手曰く、「自分を誘惑した男がここに今いるのだという不思議な、気抜けするような確信」(“the strange enervating conviction that her seducer confronted her”)を抱く。TD (1982) III, p. 82. 第3局面以降テスとともに被害者の物語へと読者を誘導してきた語り手ではあるが、ここではアレクを、彼女を「誘惑した男」と形容している。テスの「尋常ではない」経験そのものに言及しているわけではないが、これは語り手がそれまで暗渠に沈めてきた誘惑の物語がテキストに姿を顕わした瞬間だと言えよう。

かった娘だった。(281)

告白を逡巡するテスを弁護するためであろうか、語り手はテスを「大人にならぬうちに、小鳥のように畏にかかった娘」と言い、被害者としてのテスを前景化しようとする。だが語り手のレトリックが奇妙に響くのは、ある時を境にテスとアレクの関係はセクシュアルな共犯関係に変質していた、と語り手自らが仄めかしていたからである。テスの過去を被害者の物語に解消することはテスの「尋常ではない」体験を捨象することでもある。テスはセクシュアルな感覚ゆえにアレクの許に留まり、短くも「暗いただならぬ関係の思い出をもつ」女性であった筈なのだが、語り手はその「暗い」「思い出」を抑圧し、テスの過去を被害者の物語として紡ぎ出しているのである。

言うまでもなく、第2局面の語りにはハーディが修正を施さなかったなら、語り手の抑圧行為は問題として浮上することはなかっただろう。問題はしかし、修正後の本文には明らかに齟齬が生まれており、その齟齬の影響は後述の通り、語り手の言葉だけでなくテスの言葉にも及んでいるのである。

『ダーバヴィル家のテス』において、過去の記憶とその再現の問題が先鋭化してくるのは、トラントリッジでの出来事を自身の言葉でテスがエンジェルに語る、所謂「告白の場面」においてである。初夜にエンジェルから「見も知らぬ女と四八時間の放蕩に耽ったこと」(318)を告げられると、それに勇気づけられて「アレク・ダーバヴィルと知り合った事情とその後のいきさつ」(318-19)を夫に語り始める。ここに至って漸く、封印されていた過去の記憶がテス自らの言葉でエンジェルに語られることになるわけだが、テスは自身の過去にいかなる言葉を与え、いかなる物語として再提示するのだろうか。

第4局面最終頁でテスは語り始め、その告白は第5局面冒頭では既に終わったものとして読者に提示される。つまり、テスの告白は語りの空白としてしか存在しないわけだが、過去を赦してくれるようエンジェルに懇願するテスの科白には、告白の残滓ともいべきものが認められる。

「エンジェル！——エンジェル！ わたし、ほんの子供だったのよ——そんなことがあったとき、子供だったんです！ 男のひとのこと、全然知らなかったんです」(329)

ここでテスの言わんとすることは、「子供」であった自分は無知であり、無知ゆえにアレクに巧みにつけこまれたということであろう。だが精神の埒外でエロスが自立してくるようなテスの経験は、「子供」という言葉では語るることのできない体験であった筈であり、とりわけヴィクトリア朝的な意味での「子供」——あの無性的存在を指す言葉——によっては説明できない体験であった筈である。それにもかかわらず、テスはここで無性や無垢の象徴「子供」という言葉を繰り返し使用しており、そのためテスの叫びは過去の欲望を「子供」という言葉で無化しようとする心理機軸の顕われのようにも見えてくる。そもそも愛するひとに誠実でありたいとの想いからテスは夫に過去を告白したわけだが、改変によって生まれた語りの齟齬はこの場面にも奇異な意味効果を齎しており、皮肉にもテスの想いを裏切りかねない結果となっている。

告白後、エンジェルに遺棄されたテスは、自活の道を模索するべく幾つかの酪農場を転々とし、その後「ひもじいじけた土地」(393) フリントクーム＝アッシュの農場で「奴隷のように」働く。そんなある日、似非説教師となったアレクと再会する。「ぼくはここにいるんだよ、ねえ愛しいひと。昔とおなじさ！」。再度彼女を誘惑して情婦にしようとするアレクに、テスは次のように応じている。ハーディの自筆原稿によると〔図1参照、なお原稿内部における加筆は／／、削除は——で表記する〕、

「あの時とおなじじゃありません——おなじではないんです／／全く／／——違いますとも！」彼女は懇

(474) ~~427~~ 432

after you are dead: do that, & it will be a bad thing for you, I can't  
 warm up. ~~to you~~. Hang it <sup>any more</sup>, I am not going to feel responsible  
 for my deeds & passions, ~~of this world, & of the world to come~~.  
 & if I were you, my dear, I would it either. <sup>Well - never mind - he resumed.</sup> <sup>So here I am, my love,</sup>  
 as in the ~~best~~ <sup>old</sup> times!" ~~he resumed.~~  
 "Not as then - <sup>never</sup> as then - it is different!" she cried. "O why  
 didn't you retain your faith, if the loss of it have brought <sup>me</sup> to  
 speak to me like this!"  
 "Because you've knocked it out of me; so the evil be upon  
 your sweet head. Your husband little thought how his teaching  
 would recoil upon him. Ha - he - I'm awfully glad you have made  
 an apostate ~~of me~~ <sup>of me</sup>, again, all the same.... Tess I am more taken  
 with you than ever X. (see back of this)  
 She could not get her morsels of food down her throat; her  
 lips were dry, <sup>& she was ready to choke.</sup> the voices & laughs of the workfolk eating & drinking  
 under the eaves came to her as if they were a quarter of a mile off.  
 ¶ She tried to argue, & tell him that he had mixed in his dull  
 brain two distinct matters, ~~morality & theology~~, which had nothing  
 in common ~~by~~ but long association. But owing to Angel's  
 reticence, & to her being a vessel of emotions rather than reasons,  
 (to her absolute want of training) ~~distinct contents~~ she could  
 not get on.  
 "It is cruel to me!" she said. "How - how can you treat me like  
 this talk!"  
 "So, if you care ever so little for me?"

図 1

願するように言った。「／それにわたし、熱くなったことなどないわ。／ああ、なぜあなたはせっかくの信仰を持ち続けなかったんですか、信仰を失くしてそんなことをわたしにおっしゃるくらいなら！」

推敲の過程で加筆された「それにわたし、熱くなったことなどないわ。」という言葉に注目したい。たとえ一時とはいえ、アレクへの欲望が「現に動かし難く」あり、「尋常ではない」エロスの目覚めをテスは率直に認めていた筈だが、この場面に加筆が施された結果、テスは一転して「それにわたし、熱くなったことなどないわ」と断言することになった。原稿の最終形では、過去の欲望の存在そのものをテスは言下に否定して、あたかも自身の側には愛も欲望も不在であったかのように振舞うことになった。原稿内部の加筆と第

5版への改変によって生まれた語りの齟齬はこの場面のテスの言葉に触手を伸ばし、皮肉なことにその言葉を、過去の欲望の隠蔽を目論む不誠実な言葉として読みうるものに変質させていると言えるだろう。

テスはブラジルから帰国したエンジェルが迎えにやってくる、「遅すぎた、遅すぎたわ！」(513)という言葉とともに彼を一旦追い返すが、その直後に、アレクを衝動的に殺害してエンジェルの後を追う。テスの口からアレク殺害の理由がエンジェルに語られる場面には、テスと語り手の奇妙な関係が露わになってくる。

「でも、エンジェル、あなたのためにも、わたし自身のためにもそうしなければならなかったのです。ずっと以前あのひとの口を手袋で殴りつけた時から、いつかわたし、こんなことをしてしまうんじゃないかと思っていましたわ。あのひとは、まだ何も知らない幼かったわたしに罠をしかけて、わたしを通してあなたにもひどいことをしたんですもの〔後略〕」(523)

「あのひとは、まだ何も知らない幼かったわたしに罠をしかけて」というテスの科白に注目したい。初出誌からハーパー版までの本文では「あのひとは、まだ何も知らない幼かったわたしにひどいことをして」であったが、ウェセックス版の段階で「罠をしかけて」という言葉が導入され<sup>13</sup>、テスの科白は語り手の言葉——テスは「大人にならぬうちに小鳥のように罠にかかった」と奇妙なほど類似してくる。最終稿のテスは、語り手の言葉を模倣するかのように「幼さ」のイメージや「罠」の隠喩を使用し、被害者意識を吐露することになった。その結果、テスと語り手との奇妙にも共鳴する意識がここで前景化されることになったとも言えるだろう。

このように第5版以降の『ダーバヴィル家のテス』では、語り手もテスもトラントリッジでの経験を反芻しても、テスがアレクに対して抱いた筈の欲望に言及することはない。そのためテス本人も語り手も、あの「尋常ではない」体験など存在しなかったように振舞っているか、あるいはそれを無意識的にせよ意識的にせよ隠蔽しているかのように見えてしまうのである。

第5版刊行から二十年の歳月を経てハーディは、「本のなかには間違いなく、作者が意図して書いた以上のものが入り込んでしまうものだ」<sup>14</sup>と書き記している。改変の余波を蒙った『ダーバヴィル家のテス』のテキストには、ハーディの「意図して書いた以上のもの」が紛れもなく混入しており、それはハーディの理知的な計算を超えたところでテキストに産み落とされたもう一つのテスの物語であり、過去を隠蔽する「不誠実な」テスの物語として解釈しうる、奇妙な物語であったと言えるだろう。

13 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan, 1912), p. 491.

14 Thomas Hardy, "Postscript" to *Jude the Obscure* (London: Macmillan, 1912). p. xii.